

「信念の政治家」 大平先生

片岡礼次郎

人間の出会い、触れ合いは運命的なものだといわれるが、私が最初に大平さんを身近に覚えるようになったのは、駆け出し記者の頃である。大平さんの地元、観音寺の支局に勤務していた折、帰郷した大平さんを囲んで、つれづれの話に「味」をかみしめたものだった。しかし当時の印象としては、地元民へのサーブもやらないし、同時にへつらうようなこともせず、正直にいつて選挙演説も上手とはいえなかった。それでも大平さんは、亡くなるまで、一見、無器用とも思える「大平ベース」を変えなかったのではないだろうか。その後、私は東京支社勤務となり、中央政界を舞台にした大平さんと接することになった。

よく、政治家は地元民に対する顔と中央政界での顔と、二つの違った顔を使い分けるといわれる。ところが、大平さんは地元で接した時と同じ顔をして政務に励んでいた。ちょうど佐藤政権の末期で「ポスト佐藤」をめぐる党内抗争が頂点に達している時だったが、大平さんも総裁候補の一人でありながら、実に恬淡としたものだった。こんな大平さんに、讃岐男の真骨頂を見る思いがしたものである。

間もなく田中内閣が誕生し、大平さんは外相となり、日中国交正常化交渉の推進役として奔走された。自民党内の一部には根強い反対意見があり、大平さんは何度か党内から攻撃の矢面に立たされた。しかし、どんなに批判され、中傷されても、大平さんは微動だにしなかった。まるで信念の塊のようであり、じつと攻撃に耐えている様は、「田舎の地蔵さん」のようにさえ思えた。結局、大平さんは党内の反対や批判を乗り越えて、日中復交を

実現したわけだが、私も大平さんに同行して北京での日中正常化交渉を取材した。中国側の厳しい条件の中で、粘り強い交渉を行い、日中間に平和の橋を架けたのは、大平さんの功績だと強く信じている。

今日、ソ連の動向を考えるにつけ、日中関係が現在のような進展を見ていなかったら、いったいどのような状況に置かれていただろうか。改めて、信念の人・大平さんの実績を高く評価しなくてはならないのである。

ただ、大平さんの政治姿勢を理解するジャーナリストの一人として、大平さんの大衆的な人気も、もう一つ盛りあがらなかつたことは残念に思えてならなかつた。五十三年秋の自民党総裁選の時に、私は生意気のようにであったが、大平さんに「もう少し黨員にアピールするような発言をしたらどうでしょうか」と進言したことがあった。実際に、競争相手の総裁候補は、それぞれに歯切れのよい政策目標を打ち出して、新聞やテレビを賑わしていた。しかし、大平さんは「できもしないことをいって人気を得るようなことはすべきではない」と、毅然たる態度を示したものである。

初めての総裁予備選挙で総裁に選ばれ、念願の総理大臣に就任した大平さんが、真つ向から取り組んだのが「財政再建」であった。歳出の切り詰めと「増税」など決して国民的人気を得られる方策ではないが、大平さんはあえて「一般消費税」の導入構想まであげて体当たりした。五十四年の衆院選では、この一般消費税問題は裏目に出たが、このことは目先の選挙の勝敗を度外視した、大平さんの信念の発露だったものと信じている。

財政再建は、政治の最大課題として鈴木内閣に引き継がれているが、大平正芳という政治家の再評価論が今日、政治学者などの中で検討されているにつけ、実に惜しい「哲学を持った政治家」を失くしたものだ、郷土の先輩というだけでなく、政治記者の一人としてまことに痛恨の極みである。大平正芳先生に香川県第一号の名誉県民の称号が追贈されたのも、またむべなるかなである。

(四国新聞東京支社次長兼編集部長)